

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4371500010		
法人名	有限会社 さかがわ		
事業所名	グループホーム遊鳥		
所在地	熊本県天草市栖本町湯船原759番地		
自己評価作成日	平成23年1月5日	評価結果市町村受理日	平成23年3月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市南熊本三丁目13-12-205号
訪問調査日	平成23年1月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・開設から5年を迎えようとしており地域の方々のボランティアの数もさることながら種類も豊富になってきている。例えば、散髪、アロママッサージ、大正琴の演奏などである。また、小学生のワークキャンプ受け入れや中学生のマンドリン部の演奏訪問、プランターに咲かせた花をいただいたりと地元学生との交流も行っている。
 ・職員は”あまくさ認知症を地域で支える会”に多数加入している。また、キャラバンメイトに登録している職員は現在、地元老人会の集まりの際に認知症サポーター養成講座の講話を行っていて認知症について正しい理解と協力者になっていただくことを呼びかけている。
 ・利用者様に対してはホームの理念である”笑顔でゆつくりと安全に”の考えの下、小さなことでも職員

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設からの五年間地域に支えられた事に感謝し、今年度は”地域に頼られるホームを目指します”を目標に掲げ、代表者・管理者・職員が一丸となってそれぞれの資格や特技を活かしながら地域貢献をはじめ積極的な取り組みが展開されている。認知症高齢者施設としてホームの役割も十分認識し、認知症への啓発に繋がる講習会の開催についても、今後、高齢者を支える家族や、小・中学生への講習会開催も検討されており、その意欲は大いに評価される。入居者一人ひとりのこれまでの関係を大切にしたいと熱く語る管理者、職員の明るさとバランスの良い配置は家族の信頼や安心に繋がっている。“地域に頼られるホーム”として今後も遊鳥の活躍が期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆつたりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホームの理念である”ゆとりあるゆかいな生活のために笑顔でゆつくりと安全に”を毎朝朝礼で唱和している。また、今年は”地域に支えられてきた5年間…今年は地域に頼られるホームを目指します。”を目標に挙げ実現に取り組む。	理念を実践に繋げるため、ホーム内の掲示や朝礼時の唱和を始め、職員一人ひとりが理念に沿ったケアとなっているか振り返る事を管理者は伝えている。開設五年、地域に支えられた年月に感謝し、今年度は”地域に頼られるホームを目指します”という年目標を掲げ職員一丸となって取り組みたいとしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元ボランティア、小中学生の訪問受け入れや散歩時の挨拶、地元の催し事へ参加し近所の方達との交流を図っている。	月二回の介護支援ボランティアやアロマセラピー、マンドリンコンサートなどのボランティアを始め、小中学生の体験学習も積極的に受け入れている。又、地域行事(健康ハイキング)やまつりに入居者・職員で参加し地域の一員として交流に繋げている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地元小学生の夏休みのワークキャンプや社会人の職場体験の受入をしている。また、キャラバン・メイトに登録している職員が老人会に対し認知症サポーター養成講座を開講して認知症について正しい知識を伝え協力者になっていただくよう話しをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議には天草在住の利用者家族に参加案内を送付し参加を募っている。また、今年度から地元区長の参加を依頼し地域からの意見や情報をいただいている。そこでは地元の意見を同会議出席者の行政担当の職員へ伝える場ともなっている。	定期的に行われている会議の中で、ボランティアの受け入れ状況や参加者からの質問やアイデアがだされ、楽しみごと(音楽・アロマ)以外にも洗濯物たたみや、散歩、話し合いなどケア支援にも繋がるボランティア訪問は入居者の楽しみとなっている。。又、外部評価についても参加者・家族に説明が行われている。	今後は参加者からの活発な意見が展開されるような会議内容やメンバー構成についても検討することで、より充実した会議となって行くことが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	メールにより厚生労働省や県、市からの情報や連絡をもらっている。また、法令書内の文書解釈の確認などを電話や出向いたりして行っている。運営推進会議には地域包括支援センター職員が当ホーム担当として参加してもらっている。	県・市・町よりメールでの情報を受けホーム運営や入居者の生活支援に活かしている。又、代表者や管理者は電話や直接役所に出向き意見交換や報告を行うなど、良好な関係が構築されている。今後も管理者の持つ認知症サポーター養成講師の資格を活かし、担当者との連携を深め地域貢献に努めたいとしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は開錠し、他者へ悪影響を与えるとき以外は、“本人の意のままに…”を念頭に入れ、ケアに取り組むよう心掛けている。身体拘束禁止11項目を玄関に掲げ身体拘束ゼロを引き続き目指している。	身体拘束に関する研修会を年間計画に設け、マニュアルの作成や身体拘束禁止項目を玄関に掲げ、関係者の啓発にも繋げホーム全体で拘束のないケアに努めている。日中は玄関の施錠もなく、職員の見守りの中、散歩や自由に玄関先で喫煙する入居者の姿があった。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待が見過ごされることのないよう虐待防止について勉強会を年1回開き意識向上を目指している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関しては高齢者虐待の勉強会の中で簡単に周知した程度であり詳しく成年後見制度や日常生活自立支援事業などの勉強会を行う必要がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際に契約書に沿って契約の説明を行っている。質問や疑問がないかその際に確認し答えている。また、改定時には文書と口頭で説明している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	外部苦情申し立て機関として重要事項説明書に連絡先を記載している。また、運営推進会議には天草在住の利用者家族には参加を呼びかけていて意見をいただく場としている。	利用者からは日々の会話から意見や要望をくみ取るようにしている。又、家族の来訪時や遠方の家族へは電話連絡や運営推進会議の中でも家族からの意見を受け入れている。今後も家族との信頼関係を深め意見・要望を聞く機会を設け運営に繋げたいとしている。	重要事項説明書に記されている、事業所相談窓口について、担当者名に加え連絡先の記入も必要と思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者は極力、管理者は必ず月2回のミーティングに出席して職員の意見や入居者の状態を確認している。	代表者・管理者は定期的なミーティングの他機会あるごとに職員から意見・要望を受け入れている。今年度昼間の休憩時間への配慮や、遅出職員の昼食摂取の他、以前からリビングからの避難口として要望が出され、検討されていたウッドデッキが設置され、避難口として、又お茶やおしゃべりを楽しむ空間としても活用されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は介護処遇交付金や介護雇用プログラムを積極的に活用し給与や人員の確保に努めている。また、シフト作成や変更は体調や要事により希望の休日がほしいときに柔軟に対応できるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内の研修会は年間計画に沿ってミーティングの際に行っている。外部研修については研修案内のボードを設置し全職員が確認できるようにして極力希望の研修に参加できるように配慮している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会に加入しており、定期的な研修会や年1回の忘年会には積極的に参加している。		
Ⅱ 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に直接、本人の今の生活環境に向き顔を合わせADLや生活歴などの情報を収集している。入居時には1対1での会話の機会を設け困っていることや不安なことを話せる環境を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用者や家族の方がホームでの生活をイメージし易くするために入居前になるべく家族と利用者でホーム見学をしていただいでいてその際に不安なことなどを聞き出すようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前には必ず利用者の方の現在の生活の場に向き家族同伴のなか、状態を把握しサービスの見極めを行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	畑仕事や地域の習わしなど職員が教わることも多々あり共に支え合い生活している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には家族にしかできない役割があることを伝え協力を得ている。例えば利用者が自宅の仏壇が気になり落ち着かないときは、家族の都合が良い日時に1～2時間だけでも自宅帰省をお願いし利用者の心の安定に繋げている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族が遠方に居る方などには職員が同行して、自宅の様子を見に行ったり入院している家族の面会、墓参りなど大事な人や場所との関係が継続できるように支援している。	大切な人や場所、馴染みの関係継続の支援の大切さを全職員が共有し、プランに盛り込み実践に繋げている。馴染みの美容室、かかりつけ医支援、入居者の健康状態や家族との連携に配慮した帰省や外泊、故郷訪問など多くの支援を実践している。近々、職員が同行して離島出身の入居者の墓参りや家族の見舞いも兼ねた帰省が予定されている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者間の相性や正確を考慮して食事の席などを考慮している。孤立しがちな方も職員が気掛けて声を掛けたり、大好きな猫と生活できる環境を作ることで猫を通じて他者との交流が図れている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他法人の介護保険施設に移られた方もたまにホームに遊びに来たり、逆にホームから職員や他入居者数人で面会に行ったりと良好な関係が継続できている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃のコミュニケーションの中から本人の思いを探っている。また、言葉の裏にある本人の思いにも気がつけるように日々のコミュニケーションを図っている。	入居者との日ごろの会話や散歩時やソファで寛いでいる時など寄り添いの中で思いや意向を把握している。又、ミーティングや朝礼時などで情報を共有し全職員でその方に合った支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	認知症介護には生活歴などの情報収集が重要であることを職員全員が認識しており入居してから家族や本人から情報を収集している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の大まかな生活状況やいつもと違う言動など記録に残し職員の情報の共有に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員全員で日頃のコミュニケーションの中から本人の言葉や言葉の裏にある思いを汲み取れるように本人の担当職員と確認検討している。	職員間のチームワークにより情報が共有され、入居者や家族の意向、かかりつけ医のアドバイスや法人の持つ福祉用品の機能や大切な方との関係継続を個々のプランに取り入れている。計画担当者(管理者)は、それぞれの家族に応じた話し合いや説明の機会を大切にしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の生活状況を個別の記録やチェック表に記入して全職員で共有している。その情報を下に月2回のミーティング時に見直しを検討している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	母体が福祉用具を取り扱っていて入居者にはベット、車椅子、歩行器など無料で貸し出しをしている。また、同母体の他町にあるグループホームや小規模多機能事業所との交流も行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域支援ボランティア、地元中学生のマンドリン演奏や職員の知人を介して地元の美容師、アロママッサージ師の訪問があったり日頃の買い物は利用者と一緒に行き極力地元の店で購入するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の変更を承諾いただいた利用者は協力医療機関の医師に変更していただいているが、病状によってはかかりつけ医より家族に説明や確認をとって専門医を紹介していただいている。	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援し、協力医療機関をかかりつけ医とする入居者は月二回の往診が行われ、それ以外の方もホームや必要に応じ家族が受診に同行している。受診結果は面会時や毎月のお便りの中で随時電話にて報告し共有している。ホームの細やかな健康・医療面への支援は家族の安心や信頼に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所内の看護師や協力医療機関の看護師に緊急時はもちろんの事定期的に病状を説明して、指示を仰いだり助言をもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院がスムーズに行えるように情報提供を活用している。また、入院の場合は本人の不安や寂しさを極力抑えられるように、出来るだけ面会に行き本人の表情や病状の把握に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	前回と同様今の段階では終末期になってみないと判断出来ないと思っている家族が殆どであるため異常時はもちろんの事、家族面会時など状態報告を行っている。今後書面での家族の思いを具体的に確認していきたい。	入居時に本人・家族の精神面に配慮した文書により、重度化・や終末期の対応について説明を行っている。今後も家族とのコミュニケーションを大切に、現況報告と合わせ、思いや希望を確認し望まれる支援に努めたいとしている。	今後、本人や家族の思いを書面で確認しホームでできる対応に努めたいとしており、職員間の重度化や終末期に向けた取り組みの共有と合わせ、研修会の計画も望まれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	今年度、全職員普通救命講習をうけており、救急法や応急手当の確認はしているが、実際に対応出来るか不安である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地元消防団の視察依頼や年2回消防署員立ち会いのもと火災を想定した消防訓練を実施し意識向上と動きの確認はできているが、課題として水害時などの避難場所、行動を口頭で確認したのみであり実際に訓練による動きの確認をしていきたい。	消防署立ち会いのもと年2回の避難訓練を実施している。日中を想定した訓練では近隣住民に声かけし、火災通報装置に代表者が登録される等、協力が得られている。又地元消防団に視察を依頼し室内の状態や入居者の状況、避難経路について確認をお願いしている。本年度、避難口にウッドデッキを設置し安全かつスムーズな経路を確保している。	有事に備え水や懐中電灯等の備えをしている。管理者は風水害や地震に対する訓練の必要性を感じており実現が期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	親しみを感じられるように、時々名前を呼んだりする時もあるが、基本的には名字で呼ばせていただいている。そして、善し悪しであるが方言を使うことによって話しやすく親近感を感じてもらっている様に思われる。	親しみのある方言を交えながらも尊厳に配慮した会話となるよう心がけている。呼称は基本的には名字としているが、その方や状況に応じ名前でも呼んでいる。夜間居室でポータブルを使用される方には、入り口から見えないよう衝立を設置するなどプライバシーに配慮した取り組みである。入室の際のノックや事務所内での重要書類管理も確認された。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の希望には、なるだけ添えるよう心掛けているが、対応困難な要望や要望頻回時には、会話対応し、時間日日を改め対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな朝昼晩とホームの流れはあるが、本人の思い思いで起床就寝をされる為、食事時間など本人のペースに合わせ、したくない事は無理強いせず柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪ボランティアを地元の美容師にお願いし利用者には、散髪ボランティア、職員によるカット、近所の美容室とを選べるようにしており、カットとヘアカラーを実施している。衣類は可能な限り本人に選択していただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	全利用者でないが、食材の購入から調理の下準備、配膳下膳をお願いしている。食器洗いも自発的に手伝いしていただいている。	入居者の希望を取り入れ、旬の食材や菜園の野菜を活かした献立を作成している。入居者も食材購入や配膳、保存食作り(切干大根・梅酒など)等できる事を一緒に行っている。地元ならではの刺身を取り入れたり、弁当の日、行事食など工夫を凝らした食事支援を提供している。テーブルやコタツで職員と会話を楽しみながらの食事時間であった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事、水分量は大まかに把握しており、食事量が不足していると思われる時は、おにぎり、甘味物を提供し、夜間でも本人の要望に応じて、温、冷、好みに合わせ水分補給に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自立の方には、声掛けにて誘導し、介助の必要な方には状況に応じてケアしており、口腔内の異常を確認した場合は訪問歯科の往診、相談指導をお願いしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者の体調を考え本人が安心されるようリハビリパンツ、尿取り、夜間紙オムツを使用しているが、オムツ使用されている方も本人の訴え時トイレにて誘導排泄されたり、極力失敗なく排泄出来るよう声掛け誘導を促している。	個々のその時の体調や状態に応じ、布・リハビリパンツ、尿取りを使用し日中はトイレでの排泄を支援している。夜間も個々に応じた支援に努め使用したポータブルは毎日、本体も定期的に洗浄を行い清潔に保ち、気持ちよい排泄に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	芋穀類等をとりえた食事や、おやつを提供、その時水分摂取を促している。その他散歩に出たり、運動時間を設けているが参加者のかたよりも見受けられる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことのできる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的には、毎日昼から夕食前まで入浴出来るようにしているが、その他の時間外では対応が難しい…しかしシャワー浴であれば希望時汚染時常に柔軟に応じている。	毎日準備を行い、基本的には午後からの入浴としているが希望や必要に応じシャワー浴を支援している。希望により毎日や最低週二～三回の入浴支援に努めているが拒否の方へも無理強いせず本人の納得いく状態での支援を大切にしている。日帰り温泉旅行も実施されている。	今後は温泉入浴を計画的に行いたいとしており、入居者の外出も兼ねた楽しみ事の機会となることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中、本人の好きな場所時間の休憩を支援し、夜間不眠や不安を抱かれる方には、添い寝をしたり、無理に入眠を促したりせずお茶を飲みながら会話を楽しんだりし、安心していただけるよう努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人記録、病院受診往診記録に医師、薬剤師の指示の内容をファイルし、記録している。しかし薬についての知識はまだ不十分であり更に知識を深めて行きたいと思えます。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	畑仕事や編み物、家事手伝いなど、出来ることを探し、1人1人に適した活動をお願いし支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出は希望される一部の方になりがちであるが、家族や利用者の要望やその日の状態により、大切な家族の面会、御大師様参拝や山、海等ドライブを行っている。	天候や入居者の体調に配慮しながらホーム庭先・ウッドデッキでの日光浴や近隣の散歩を行っている。地域の方々の協力による町主催のハイキングや鬼火(どんどやき)見学、家族との外食や外出、日帰りバスハイク(花見・温泉・外食)など季節に応じた支援も実施している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の了解のもとお金を所持されている方もおられ、私物を購入する際は、本人の財布の中から自分で支払いをしてもらい、職員は傍で見守っている。必要時は介助に入っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の声が聞きたいと要望があった利用者には、直接家族と電話で話していただき安心してもらい、贈り物や手紙があった時は職員と一緒に手紙を書いたり、電話を入れ話してもらっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に応じホールの飾りや草花を変え行事時の写真の掲示、又菖蒲湯やゆず湯の実施し、季節感を感じていただけるよう工夫している。	入居者自らが掃除される玄関周りやホールは清潔に保たれ、床暖房が施された快適な空間で入居者は愛猫とくつろぎ、賑やかに談笑されている。新たに避難口に設けられたウッドデッキは日光浴やお茶を楽しむ場所としても入居者に喜ばれ活用されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者の居心地の良い場所を優先し、テレビ鑑賞や炬燵での休憩、喫煙など思い思いの時間を過ごしてもらっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ADLの状態や生活習慣によって畳やフローリングの部屋であったり、馴染みの家具を持ってきていただいたり、利用者によっては、毎日手を合わせたいとお位牌を部屋に置けるようにし、本人の意思に添えるよう受け入れ工夫している。	入居者の身体状況や入居前の生活習慣に応じて、フローリングと畳の部屋を使い分けている。使い慣れたタンスやテレビ、座椅子、家族の写真、小物等が持ち込まれ仏壇に毎日供物をあげる入居者もおられる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	生活に必要な場所には、大きく表示し利用者の各部屋には表札をかけ分かりやすいよう工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容